



5

本堂城廻村を出て川口川を渡ると横沢村であった。横沢には堀ノ内御本陣や一里塚があり、また、ここから山際を進む白岩通りの小街道が分かれていた。菅江真澄の「月の出羽路」駒場村の項にも、「いにしへはこのあたりを白岩街道と言ひし驛程なりしよし……」と見える。また横沢には白旗八幡と呼ばれる鎮守様があり、「ささら舞」の立獅子舞がお盆に奉納されている。このあたりは後三年ノ役で活躍した八幡太郎義家の足跡伝承が色濃く残る所でもあるが、佐竹氏の祖先が義家の弟、源義光であることから八幡信仰が広く各地に流布されたものと思われる。

生保内街道は、横沢村から国見村、米沢新田村へと北上する。この二つの村の間には暴れ川である斉内川があった。天和元年（一六八二）秋田藩「領中大小道程帳」に「広、二十四間徒渡」とある。斉内川を越えた所にクヌギ



- ① 六郷の追分石(六郷町)
「東かくのだて 西はたや」の文字が彫られている。約1メートルの高さで文政元年(1818)建立。
- ② 安城寺一里塚跡(千畑町)
道の両側に一對の塚がある。西側にはサイカチの大木が残っているが東側の木は台風で倒れたため、幼木が植えられている。
- ③ 弘田の柵跡(仙北町)
国指定史跡。奈良時代後半から平安時代にかけての役所跡。平成6年に外柵南門が復元されている。
- ④ 水神社(中仙町)
御神体の「線刻千手観音等鏡像」は秋田県内では唯一の国宝に指定されている。本殿は貞享2年(1685)の建立。

6



を植えた治内野一里塚があったという。この場所は戦後、すぐ近くの観音堂(米沢新田村)に地番が移されたという。一面の原野に大クヌギが目立ち、玉川の支流である斉内川は洪水が頻発する暴れ川であった。

街道は、現在、秋田県唯一の国宝である「線刻千手観音等鏡像」が御神体となっている豊川神社の前を通り、野田、桜田を経て追分(長野(中仙町)方面からの角館街道と合流し、関口から玉川を川舟で渡って角館に入る。角館は佐竹北家の城下町であり、仙北北浦地方の中心地であった。



7

一方、横沢で分かれた白岩街道は、小曾野方面から斉内川を渡って八日市、十六沢へと向かった。小沼観音の麓にある十六沢にはサイカチの巨木が茂る一里塚が現存し、山手の十六沢城址と共に手頃な散策地となっている。古刹雲巖寺や中世の白岩城址が残る白岩から広久内の玉川渡しを経て真崎野で角館街道に合流する。これから国見峠を越えて南部盛岡に向かう街道は、角館街道でもいのだが、便宜上、生保内街道で通したい。

- ⑤ 『田沢湯元道中画報』(大坂東岳 画)より
明治10年頃の角館町岩瀬、玉川の川渡しの様子。(中仙町鈴木家蔵)
- ⑥ 角館町道路元標(角館町)
明治10年代に建てられた。ここは白岩脇街道と呼ばれた角館と白岩を結ぶ道の起点にあたる。
- ⑦ 小曾野の塞の神(太田町)
塞の神は村の入り口に祀られ、疫病、悪霊進入を防ぐことを祈った。仙北地方には現在も多く見られる。
- ⑧ 十六沢一里塚跡(中仙町)
サイカチの巨木が道の東側に残っていて、旧街道の趣を伝えてくれる。

中世戦乱の道を受けた山際の古街道

生保内街道

六郷から角館まで

歴史の道をゆく

羽州街道の脇街道の一つである生保内街道は、六郷から奥羽山脈の西麓に沿って角館、生保内(田沢湖町)に至った後、国見峠を越えて南部領に通じるものであった。横沢(太田町)からはさらに山に近づき、角館を経由しないバイパスの白岩通りもあって、街道は目的別に利用されていた。主に運ばれていた物資は米・小豆などと、南部からの塩干魚海草類であった。この街道は、向かう土地によって、角館街道、六郷街道、雲石街道、南部街道、秋田街道などさまざまに呼称されていた。



3



4

2

六郷は、鎌倉期以降、二階堂氏の流れをくむ六郷氏の本拠であったが、駅馬が置かれたのは佐竹氏が入部した後、慶長十年(一六〇五)頃で、天和元年(一六八二)には、伝馬(百十二疋)歩夫九六人を常備する宿駅となった。今でも馬苦勞町や寺町などの古い町割が残る六郷は、生保内街道への入口で、北上する脇街道は、徳川幕府の御用馬を買付けする御馬買役人の通行の際などに念入りに整備されていた。

生保内街道は角館と六郷を結ぶ現在の県道「通称「角六線」」にほぼ沿ったもので、土地の人に「まひるさん」と慕われる真昼岳から薬師岳、白岩岳などの連山を東に望みながら、実り豊かな仙北平野の東端を進んでいた。また、荒川(丸子川)や川口川、斉内川、玉川など、大小の河川を徒渡りしたり舟で渡ったりしたものである。

馬苦勞町角にあった伝馬御役所など町屋が並ぶ六郷を出ると畑屋(千畑町)に分かれる道もあって、土地の人は生保内街道よりも西側のこの畑屋道をよく利用して安城寺から本堂城廻に出たという。本堂城廻は、中世期に陸奥国和賀氏の流れである本堂氏が居館を築いた所である。元は真昼岳山麓の山城であったが、戦国時代末期に矢高川沿いの館間に平城を築いたという。当時、屋敷割二〇〇軒という城下町は東に少し離れた本堂町であった。天正年間(一五七三〜九二)の城主本堂忠親は豊臣氏の小田原征伐に参戦し本領を安堵されたが、後に常陸に転封され、本堂城は